

Dave Seaman, Dave Who?

ほとんどのDJは音楽が好きでクラブ・ライフに入っていくが、Dave Seamanは違う。DaveがDJになりたいと決めたのはまだ8才の時で、12才で早くも初めてのギグを経験している。彼がDJとして抱いていた夢は全て実現したが、情熱とクリエイティブな欲求を失ってはいない。Dave Seamanは全ての大陸でヘッドライナーとしてプレイし、一番世界を飛び回り、最高にクリエイティブで、最も成功しているイギリス人DJの一人である。Daveは日本のリーバイスの広告に等身大の写真として登場し、オーストラリアではBBC Choice World Clubbingという人気番組のプレゼンターを務め、チャンネル4の4DJシリーズにも取り上げられてる。彼はまたメルボルン、ケープタウン、ブエノスアイレスと、計3枚ものGlobal Undergroundのミックス・アルバムをリリースしてもいる。

DaveはStella McCartneyのバースデー・パーティーでプレイし、Robbie Williamsと飲んだくれ、New Yorkに住んでいたこともある。Brothers In Rhythmのかたわれとして、Kylie MinogueとPet Shop Boysをプロデュースし、U2、Micheal Jackson、Didoのリミックスも行っている。Mixmagの最初の、そして重要な編集者で、Sashaがキャリアをスタートさせた伝説のハウスクラブShelley'sのレジデントDJでもあった。Dave Seamanイギリスのクラブミュージックの革命が始まった時から現在に至るまで常にシーンをリードする存在で、周りを巻き込んでいく情熱は、輝かしいキャリアを築いた後も衰えることはない。

どれどころかDave

Seamanは過去にないほど精力的に活動している。なぜならイギリスのダンス・シーンは、一時の熱狂的なブームの後、再びアンダーグラウンドなルーツに回帰し、ルネッサンスに突入し始めていると感じているからだ。メインストリームとは離れた場所で、移り変わりの激しいポップカルチャーの流行とは距離を置きながら、クールで新しいシーンがイギリスの都市で生まれようとしている。

「今僕らは新しいフェーズに入っているんだ。イギリスのダンスミュージックは一回解体されないとね。偉大なるアシッドハウスからの解毒みたいなもんが必要なんだよ」とDave Seamanは話す。「いつまでたっても変わらない連中と付き合ってるヒマはないね。また一から出直して感じ。すごく興奮してるよ」

結果的に、Dave

Seamanは去年一年間クリエイティブな嵐の中で過ごしたようだ。まずはLuke

ChableをフィーチャーしたAudio Therapyのミックスアルバムシリーズ第二弾がルネッサンス・レーベルからすぐにリリースされる。伝説的なスタジオワークで知られるChad JacksonとのプロダクションコンビGroup Therapyからは、Scissor Sisters、Tears For Fears、Starsailorのリミックスのリリースが決まっている。またGroup Therapy名義のシングル「My Own Worst Enemy」、そして間もなくリリース予定の「Something to Believe In」では、シンガーのNatalie Leonardが、なめらかでファンキーなメロディーとPumpingなビートに乗せて、幻想的なヴォーカルを聞かせてくれている。Group Therapyが目指してるヴォーカル、強力なlickとPumpingなビートの融合は、Brothers In Rhythmを一躍有名にしたクラブアンセムが、さらにアップデートされている。

「ヴォーカルは色々試してるよ。それからいわゆるロッキーな音もね。ギターもいっぱいあるし、もちろんピコピコ音もあるよ」とDave Seamanは説明する。「アンダーグラウンドを超えて幅広い人たちにとってアピールすることが重要だね。マスアピールを与えるんだけど、その表面の下にはかなりの深い部分を用意する。そうすれば今まで以上のものが出来るはずだからね。」

Leedsで生まれ育ったDaveのキャリアがブレイクしたのがDJコンペティションであることは有名な話だ。後に世界一のミュージック・コンファレンスになるThe New Music Seminarへのチケットを勝ち取った時、Daveは画期的なDJ集団DMCのメンバーだった。DMCのボス達が、当時ニューヨークで一番ホットだったクラブNell'sで並ばされていた時、ドアマンと友達だったLeedsのティーンエイジャーが現れて、列の中でいらだつクラブ、業界人、有名人を差し置いてボス達をクラブに入れることに成功した。これがきっかけで、DMCのボス達は雑誌MixMagの編集者として彼を採用することになった。

創刊初期のデーブの働きによって、MixMagは世界をリードする雑誌になり、今もその人気を保っている。彼はこの雑誌での仕事は、DJとしてのキャリアを築く上で大きなものだった。MixMagのフォトグラファーであったGary McLarnenがStoke on TrentにShelly'sというクラブを作ったとき、彼はレジデントとしてSashaのウォームアップをつとめることになる。Shelley'sを瞬く間に90年代初頭の伝説的なクラブになり、デーブのDJとしてキャリアも本格的にスタートする。

Dave

SeamanがトップDJの中でもユニークな存在なのは、彼の柔軟さにある。彼は自分の音のアイデンティティを失うことなく様々なジャンルを行き来することが出来る。彼は世界有数のアンダーグラウンドDJだが、天才的プロダクションパートナーであるSteve AndersonとのBrothers in Rhythmとしては、メインストリームのポップアーティストとも仕事をしてきた。90年代初頭にBrothers in Rhythmは、夢見るようなソウル・ヴォーカルと強烈なハウスビートを融合させ、「Such A Good Feeling」「Peace And Harmony」、そしてSabrina Johnstonの「Peace In The Valley」のリミックス等の今やクラシックとなったクラブ・アンセムを生み出してきた。これらのトラックはイギリスのダンスミュージックのゴールデンエイジを代表する存在であり、これらの作品によってBrothers In RhythmはPet Shop Boys の目に留まることになる。

「Such A Good Feeling」はPet Shop BoysのChris Loweにとって90年代のベストレコードだ。Brothers In Rhythmは突然ロンドンの最も豪華なスタジオで、Pet Shop Boysと共に「Go West」、「Was It Worth It」、「DJ Culture」をプロデュースするという大きな機会に恵まれることになる。Brothers in RhythmはまたKylie Minogueの「Impossible Princess」とアルバム「Kylie Minogue」をプロデュースし、「Did It Again」や、魅惑的な雰囲気を持ち、（たぶん今まで一番誇りに思っている曲だとDaveが話す）「Confide In Me」といったトラックを制作する。90年代最大のポップバンドであるTake That!のアルバム「Nobody Else」、あるいは「Never Forget」、「Sure」といったシングルをプロデュースした時には、スタジオに侵入しようとするファンが巻き起こした騒ぎに巻き込まれもした。Take Thatの最もカリスマティックなメンバーであるRobbie Williamsと一緒にワイルドな夜遊びにも出かけたのはこの時だ。

90年代初頭には、イギリスが始めた生み出した独自のハウスミュージックスタイルであるいわゆるプログレッシブハウスが台頭してくる。DMCのDave Seamanと元MixMagの副編集Nick Gordon BrownはStress Recordsを立ち上げ、Sasha, Groove ArmadaのAndy Cato、John Digweedの初期のプロダクションをリリースする。Brothers In Rhythmはアメリカのグループ、イギリスのダブ、ヨーロッパのテクノの感性を融合させたこの新しいジャンルを歓迎し、Brothers Love Dub名義でThe Mighty Ming、Creative Thieves名義でNasty Rhythmといったプログレッシブなトラックを次々に制作した。彼らはさらにDavid Bowie、Placebo、U2、Alanis Morissette、New Order、Blur、Stingといった超大物のリミックスも手がけている。メインストリ

ームのポップとロックにこれだけ大きなインパクトを与えたイギリスのプロダクション・デュオはBrothers In Rhythmにおいて他にはいない。

1998年にDave

Seamanはニューヨークのイーストビレッジにしばらく移り住むが、1999年にイギリスに戻ると、志を同じくする仲間とAudio

Therapyを立ち上げる。このレーベルには現在にいたるまでトップクラスのDJとプロデューサーが所属している。Dave SeamanはLexicon Avenue、Jonathan LisleそしてPete

Goodingといったイギリス勢に加えて、メルボルンの活気のあるクラブシーンと繋がりを強め、イノベーティブなDJ/プロデューサーであるPhil KとLuke Chable、そして現在絶好調のエレクトロニッカのライブ・アクトInfusionを送り出している。Audio TherapyはさらにJames Holden、Timo Maas、Anthony Pappaといった世界的なDJ、さらにSlacker、Evolution、The Lightといったグループとも仕事をしている。

Audio Therapyはまた代表的な独立系レーベルでもあり、DaveのGroup Therapyプロジェクト、そしてプログレッシブからブレイクビート、よりファンキーなフレンチハウスまでをカバーする多様なタレントのホームグラウンドでもある。Infusion、Habersham、Ernest Saint

Laurent、Stellはここからレコーディング・キャリアをスタートさせている。こうした体制が整っていることを考えれば、Dave

Seamanが世界中でのDJとしてのコミットメントを減らして、レコーディングおけるのキャリアに少しずつ重点を移しているのは驚きではない。

そうはいつでもDave

Seamanは人も羨む国際的な評価を確率したスターDJであり続けているし、彼の人なつこい北部イングランドのユーモアは、彼がセレブ気取りの傲慢さには縁がないことを示している。彼のウェブサイトでは、同姓同名の元イングランド代表ゴールキーパーDave

Seamanと撮ったとぼけたスナップショットを見ることが出来る。この写真こそは、自身は地にしっかり足を着けながらも、オーディエンスの手を宙に突き上げさせてきた、DJ Dave

Seamanの音楽とビジネスに対するアプローチを象徴している。

「とにかく楽しむこと、と同時に音楽はアート・フォームとしてとても奥が深いもんだってことを理解すること。その間にうまくバランスを見つけることが重要だね。僕はそうした考えをレコード制作、DJプレイに反映させてきたんだ。」と Dave

Seamanは話す。ダンスミュージックにアンダーグラウンドを超えたアイデンティティを与えるようになってやってきたんだ。」クラビングに対するこうした直感的

な理解は、Dave

Seamanこそがダンス・ミュージックのクリエイティブなルネッサンスを引っ張っていき絶好の位置にいることを意味する。「アシッドハウスは終わったよ！」と彼は叫ぶ。「アシッドハウス永遠なれって感じかな。さあ行くぜって感じだよ！」

Thanks to Shinji.